

第2章 神於山の自然再生目標と自然再生事業の概要

第1節 自然再生理念

里山（ 1 ）は、人々の生活と密接な係わりを持ちながら成立してきた二次的な自然である。しかし、近年、神於山では里山と人との係わりが少なくなり、優れた広葉樹林が減少し、荒れた竹林が拡大するなど、多様な生物にとって恵み豊かな里山の自然環境が失われつつある。

今一度、私たちの身近な自然である神於山の自然再生と今日の里山のあり方を考えることを通して、自然環境の大切さを見つめ直すために、次の理念を掲げる。

理念1：森・川・海のつながり

神於山は、大阪湾へ流れ込む春木川の源流部に位置する。山でたくわえられた水は、川となり、やがて大海へ注ぐ。「森・川・海」を一つの自然として捉え、水系一帯の保全を行い、本来、自然がもっている循環機能を回復させ、生き物にやさしい多様な生態系を育む環境を目指す。

理念2：人と自然・人と人とのつながり

これまで人は、自然とのつながりを大切にし、多くの自然の恵みを受けることにより生存してきた。

神於山における人と自然のつながりを、先人の知恵から学ぶとともに、自然の保全整備の実践をとおして、失われつつある「人と自然・人と人とのつながり」の回復を目指していく。

理念3：里山とまちとのつながり

神於山は、数多くの寺院や神社が存在し、昔から「神のおわす山」として信仰されているほか、薪の採取や散策など私たちの生活と密着した形で独自の森林文化を築いてきた。

しかし、近年は、人と里山の関係が希薄になり里山の荒廃が進行している。まちに暮らす人や子供たちに、神於山と人々との生活や文化的な関わりを伝え、今後の森林文化の継承・発展につなげる。

* 1 里山の定義

本構想では、里山を「人家の近くに位置し、豊かな生態系を持ち、都市住民であっても、気軽に利用できたり、都市と農村の交流の場となるような森林」と定義する。

21世紀美しい里山づくりの提言（平成14年11月近畿中国森林管理局）を引用